こうしてラテン・アメリカ政経学会は設立後２年を経てその内容も次第に充実してきたのであるが，第３回総会をへてここに会誌第１号を発行する運びとなったのである。今後会員の努力によって研究活動を一層活発化し，わが国におけるラテン・アメリカ研究の普及と深化に寄与することを念願する次第である。

関西支部の活動状況

常務理事　藤田正寛

関西地区でのラテン・アメリカ研究，とくにラテン・アメリカ経済の研究は，学会設立以前からかなり活発であった。その特徴は，研究が単に少数の地域経済専門者によって行なわれたのではなく，多くの研究協力者の有力なバックアップをともなったことである。ラテン・アメリカ経済それ自体の専門者ではないが，各自の専門分野における分析トゥールを縦横に駆使して，各自の対象を深く掘り下げ、ラテン・アメリカ研究の発展に寄与した研究協力者の貢献は実に大きかった。それは，経済地理学，交通論，農業経済学，国際経済学，貿易政策，国際金融論，移民論などの分野の専門者についてとくに顕著であった。

わが国のラテン・アメリカ研究の現状においては，このような形態の研究活動が最も望ましいと思われるが，ただ従来は各大学・研究機関の内部に限られている欠陥があった。ラテン・アメリカ政経学会の設立はこの欠陥を是正し，多くの大学・研究機関の研究協力体制を整備する基盤をつくり出した。第１回大会にさきがけて，昭和４０年６月１３日に神戸大学経済経営研究所において第１回関西支部総会を開き，木田和雄氏（関西大学），西向嘉昭氏（神戸大学）がそれぞれ「キューバにおける甘蔗プランテーション」，「ＬＡＦＴＡにおけるブラジルの立場」について研究報告をしたのち，学会の将来および当地区の研究活動の促進について具体的な意見の交換を行なった。支部総会は少なくとも年１回開催することにし，第２回支部総会は近く開かれることになっている。

当地区の奇妙な現象として指摘しなければならないことは，ラテン・アメリカ研究活動と支部活動との間にギャップがある点である。ラテン・アメリカ研究は，従来通り地域専門者が多くの各専門分野の研究協力者の支持を得て盛んに行なわれているのに，支部そのものの活動と

しては会員数がきわめて少ないので一見低調に見える。これは，有力な研究協力者がすでにいくつかの学会に所属し，とくに本学会に入会しようとしないことに起因する。関西はその土地柄もあり，会費の引下げがあれば入会希望者も増えると思われるが，両者はまた相互に関連するので早急な解決は困難かもしれない。そこで，関西支部の研究活動を促進するため，正式の会員であることを問わず，ひろくラテン・アメリカに学問的関心をもつ研究者を含めて活動を推進する方針をとっている。オ1回支部総会がすでにそうであったし，今後もある程度この方針をつらぬき，それが漸次正式会員数を拡大するのに役立つことを念願している。

第2回研究大会の概要

オ2回研究大会は昭和41年11月19，20の両日，上智大学において開催された。オ1日は総会のあと，「ラテン・アメリカの近代化」というテーマでシンポジウムを開き，佐々木専三郎氏がチエアマンとなり，中川和彦（法律），西向嘉昭（経済），アンドラーデ（社会思想），マルチン（歴史）の各氏がそれぞれ報告を行ない，これらをもとに活発な討論が交わされた。

オ2日は次の研究報告発表が行なわれた。

1. 国際投資の法的保護 ―ブラジルの場合 …… 桜井雅夫
2. ペロニズムの歴史的背景 …… 三谷 弘
3. メキシコの工業水準と成長要因 …… 水野 一
4. 西印度商船とセビリャ貴族 …… 木田和雄